

# 英語学習に関する学生のビリーフ ー アクション・リサーチ ー

鈴木 栄<sup>1</sup>

## Learners' Beliefs about Learning English: Action Research

Sakae SUZUKI

### Abstract:

This paper reports on what beliefs SIT students hold regarding English learning. Their beliefs were elicited via a discursive approach by investigating metaphors they used in a questionnaire. Metaphors are supported to reflect students' beliefs about their experiences of learning English. By classifying and examining their metaphors, what students think about learning English can be revealed. The paper also describes implementations of English Literacy I, which were designed based on the findings of the students' beliefs.

**KEYWORDS : learners' beliefs metaphor motivation action research**

### 要旨:

学習者のもつビリーフをメタファーによって取り出し、学生が、英語学習および英語に関してどのような考え方を持っているかを探った。また、その他のアンケートへの回答と併せて、学生のモチベーションを上げ、英語への関心を高めることを目標として、前期の授業を組み立て、その結果、ビリーフがどのように変化したか、なぜ変化したのか、について考察し、英語の授業のあり方への示唆を議論する。

## 1. はじめに

第2言語習得研究における、学習者の belief (以下ビリーフとする) に関する研究は、1980年代に、Horwitz(1987)<sup>1)</sup> が開発したビリーフを測る尺度としての質問紙である Beliefs about Language Learning Inventory(BALLI)に始まり、学習者のストラテジー、動機、不安などの研究へと発展している(Trang, Baldauf, & Moni, 2013)<sup>2)</sup>。学習者が持っているビリーフは、英語および、英語学習に対して学習者が持っている考え方であり、それを知ることには、カリキュラム編成、授業改善、評価などにおいて必要である。BALLI などの質問紙を使った研究(Sakui & Gaies, 1999<sup>3)</sup>; Nishioka, 2002<sup>4)</sup>; Suzuki & Kumazawa, 2008<sup>5)</sup>)では、ビリーフの構築や変化が深く探れないことから、ビリーフのダイナミックな側面を研究するための研究方法が探られてきた。

そうした手段の1つとして、metaphor を分析する方法がある。metaphor は、日常生活の中で自分の経

験したことを話したり書いたりする行為によって表される(Kramsch, 2006)<sup>6)</sup> という理解のもとに、ビリーフ研究でも、特に、ビリーフの変化に注目する際に使われている(Tanaka & Ellis, 2003)<sup>7)</sup>。

今回の研究では、アンケートの結果から、学生が英語学習に関して持っているビリーフを探り、ネガティブなビリーフをポジティブなものに変化させるべくアクション・リサーチをおこなった。

## 2. ビリーフ研究の背景

ESL(第二外国語習得としての英語)の研究では、20年ほど前から、学習者に焦点が当てられてきている。教授法研究も重要であるが、授業を受ける学習者の考え方、学習歴などを知ることで、多様な学習者のニーズに応えようということである。学習者のビリーフとは、学習経験などにより作りあげられた、学習に対する考え方である。一人ひとりの学習者の持つビリーフは、同じではないが、共通した学習経験がある場合には、同じようなビリー

1 湘南工科大学 工学部 総合文化教育センター 教授

フを構築すると考えられ、それは、学習方法にも影響を与える。例えば、英語の発音を重視する教育を受けてきた学習者は、発音練習を望むであろう。英語を流暢に話すためには、海外生活（留学）が必至であるという強いビリーフを持つ学習者は、日本での英語学習への強いモチベーションを持たないかもしれない。

学習者のビリーフの研究が必要である理由は、学習者は、自らの内部に存在するビリーフに従って行動をし、学習方略を組み立てていくため、学習者のビリーフを知ることは、教える側にとって、シラバスを作りあげる上で重要であるためである。Wenden (1987)<sup>8)</sup>の研究では、インタビュー調査の分析から、学習者が言語学習についてビリーフを持っていること、そのビリーフに従った行動をしていることが指摘されている。

ビリーフが学習者のメタ認知的な支えであると考えると、それを変えることによって、学習者のストラテジー（方略）が変化すると想定される。学習者がどのようなビリーフを持っているかを知ることにより、学習者のストラテジーが想定できる。つまり、間違ったストラテジーを実践している学習者は、誤ったビリーフを信じていることになる。学習者が、より効果的な学習をすすめる、よい結果を出すためには、ビリーフを変えるような働きかけが必要となってくる。教師の側から見ると、そうした学習者のビリーフを知ることが授業運営の役に立ってくる。

Kramsch は、metaphor を使いビリーフを取り出す研究をおこなった。Kramsch によると、言語を学ぶことは、新しい場所を旅するようなものである、と書いたとすると、その学習者は、頭の中で、source domain である travel を、target domain の言語学習へ繋げているわけであり、それゆえに、外国語を学ぶことを概念化している、ということである (p.112)。

Kramsch は、UCBerkeley の 14 の外国語を学習する学生 953 人に、アンケート調査をおこなった。目的は、学生が、自分の言語学習経験をどのように概念化するかを調べることであり、metaphor を取り出すことで、それを探ろうとした。質問は、1. Learning a language is like ..... 2. Speaking this language is like..... 3. Writing in this language is like ..... であり、「言語学習の経験をどのように描写するか」を聞いた。今回の調査では、英語学習全般について聞くため、質問 1 のみ (language を English に換えた) を質問紙に入れ込んだ。

### 3. アクション・リサーチについて

アクション・リサーチ (Action Research) は、授業改善を目的とした、reflective teaching を目標とした実践研究である。つまり、理論や経験からヒントを得て授業実践をしながら、実践の経過・結果を客観的な視点で考察し、得られた知見を次の実践に移すアプローチのことである (佐野・2007)<sup>9)</sup>。アクション・リサーチが従来のリサーチにはあてはまらないという批判があるが、それは、科学論文に必要な信頼性・妥当性に欠ける部分があるからと言われている。①内的信頼性 (internal reliability)、②外的信頼性 (external reliability)、①内的妥当性 (internal validity)、④外的妥当性 (external validity) において、特に④の外的妥当性、つまり、一般論としての妥当性が欠けているという指摘がある。しかし、アクション・リサーチの本来の目的は、教師と学習者が直面している問題解決、あるいは、教授法の改善を目的とするため、その対象が異なる場合には、一般性が出にくい。教師や学生が異なる場合に、同じような結果を得ることができるかはわからないからである。しかし、1 つひとつのアクション・リサーチを、ケーススタディー (case study) のように捉えれば、そこに、ある種の一般性が生まれるのではないかと考えられる。教育の現場では、多くのケース・スタディーがなされることで、状況を分析し、よりよい授業を組み立てる糸口が見つかる。そうした意味でのアクション・リサーチの意義は大きい。

アクション・リサーチのステップは、Nunan (1999)<sup>10)</sup>によると 6 段階に分けられる。①問題の確定 (problem identification) ②予備的調査 (preliminary investigation) ③仮設の設定 (hypothesis) ④計画の実践 (plan intervention) ⑤結果の検証 (Outcome) ⑥報告 (Reporting)。これらのステップは絶対的なものではなく、実際の研究現場によってはステップが重なることもあると予測される。基本的な reflective teaching がおこなわれている限り、アクション・リサーチの効果は期待される。

### 4. 研究方法

まず、問題の確定をするための予備調査として、Kramsch (2006) がおこなった研究をモデルとして、大学 1 年生の英語学習に関するビリーフを調べた。4 月の最初の授業におけるアンケート調査の 1 項目として、「あなたにとって英語を学ぶことはどういうことですか。( ) に言葉 (文) を入れて

ください。英語を学ぶことは（ ）のようである」を入れた。回答に対する理由・説明も求めた。集めたデータは、表にまとめ、意味が不明な回答については、学生に再確認をした。

また、同時に、学生の英語学習歴、英語学習への考え方を知るための質問項目も入れた。その結果を基に、学生のビリーフ傾向を Kramsch の研究をモデルに分析し、併せて、学生の目標を調べ、その結果を授業に活かすことにした。授業実践の効果（ビリーフの変化）を知るために、15回目の授業では、再度、アンケートをおこなった。

#### 4.1 研究対象

英語リテラシー1を履修している湘南工科大学の1年生4クラス（133名）。回答数のうち、メタファーの回答が無回答であった数と、回答が、カテゴリーに当てはまらない不適当回答であったものを除く105名分のデータを分析の対象とした。

#### 4.2 データ分析

メタファーは、focus-coding (佐藤,2008)<sup>11)</sup>により、コーディングをおこなった。その後、類似したコードをまとめカテゴリー (categories) を引き出した。各カテゴリーは、学習者がメタファーによって表した英語学習観の傾向を示している。その他の情報（学習状況・学習目標・海外経験）は、学生全体の傾向を知るためにまとめた。

### 5. アンケートの結果

#### 5.1 授業以外で英語の勉強をしているか。

①はい（34）117人中

受験勉強対策	塾・授業の予習・テスト勉強・家庭教師・参考書単語を書いたり読んだり・イディオム文法
興味関心に基づいた学習	英会話・PCゲーム・英語の本・英語の音楽
自己投資（資格試験）	TOEIC用の英語・英検のための英語勉強

1年生であるため、高校までの学習経験があり、英語を何らかの形で自主的に勉強している学生は、29%はいる。受験勉強対策と考えられる塾・家庭教師・授業の予習などをしてしていると回答した学生22人を除いて、純粋に「英語への興味」あるいは、「自己の興味と英語との繋がり」で、英語に触れて

いる学生は、2人、自己の英語力への投資として外部試験対策のための勉強をしている学生は4人である。今後、大学の生活で、受験勉強から解放され、「何のために英語を学習するのか」に対する、自分なりの答えと、英語を勉強する目的・興味を持たない学生は、英語学習から離れていくことが予想される。

英検などの外部試験は、外国語学習の最終目標であることは理想ではないが、1つの指標として学生に紹介する機会を設けることもモチベーションを上げることに繋がる。

①いいえ（83）117人中

英語そのものへの嫌悪	面倒・疲れる・嫌い
勉強の仕方がわからない・苦手	英語がわからない・苦手・難しい・勉強の仕方がわからない
英語学習への優先意識の欠如	時間が無い（部活）・他の勉強をしている・留学生なので日本語学習優先
必要性を感じない	日本では必要ない・目的が無い・ある程度は自分でできた・勉強は授業以外しない
英語学習の機会の欠如	そういう環境になかった・学習する機会が無い

学習のモチベーションを削ぐ要因としては、不安、自信喪失があげられるが、英語を学習しない学生の回答にもわからないために嫌いになった、などの顕著な理由があげられている。その他に、日本での英語の必要性を感じない、目的が無い、学習する機会が無かった、という理由は、注目すべき点である。日本は、ESL (English as Second Language) の環境では無いが、多くの言語習得理論は、ESL に由来する。英語が主流であるとはいえ、日本は、未だにEFL (English as Foreign Language) の環境にある。小林 (2013)<sup>12)</sup>も、「英語を学ぶニーズがないということ（それはそれほど単純なことではないし、なくては生活できない、ということとは非常に大きな差がある。まして、日本は、多くの場合、英語力があっても便利さを感じられず、無くて生活できるのだ。やる気や根性論だけで解決しようとするには無理がある」と述べている。motivation を上げるための strategy として、Dornyei (2009)<sup>13)</sup>は、ideal self という概念を提案している。つまり、英語が使える理想の自己を頭に描くことで英語学習へのモチベーションがあがる、というのだ。そのためには、具体的な目標設定

も必要であり、実際に英語を使うシミュレーションなども必要である。そうした機会を授業で提供することで、学習者は、英語を使う意味を感じ取り、自分なりの英語学習法を考えていくことができる。

**5.2 海外経験**

学校行事でシンガポール（1）旅行（5）アメリカ・カナダ・シンガポール・マレーシア（1）メキシコ（1）アメリカ・シンガポール・中国・韓国・台湾・メキシコ・豪州（1）サイパン（2）韓国・アメリカ（1）台湾（1）英語圏（アメリカ・カナダ・オーストラリア）アジアなど（シンガポール・マレーシア・中国・韓国・台湾）その他（メキシコ・サイパン）

海外経験 無 94名（90%）

海外体験は、短期での英語能力向上にはあまり効果が無いかもしれないが、異文化理解、英語を実際に使う経験などから、多くのことを学ぶことができる（Yashima, 2009）<sup>14</sup>。短期語学研修を紹介するなど、学生が海外の研修へ行きやすい環境を整えることも重要であり、英語学習へ目的を持つ、という意味では、効果がある。

**5.3 検定試験**

英検2級合格（1）英検準2級合格（2）商業英検3級合格（1）英検3級合格（15）英検4級合格（2）英検5級合格（1）

なんらかの検定試験を受けて合格した学生数は22人であり、全体の19%である。この数値は非常に低い。英検は、中学卒で3級、高校卒では準2級合格まではほしいところであるが、英検がどのようなものかを知らない学生もいることから、受験者が多くないことが、イコール、学生の英語のレベルが低い、ということにはならない。

大学に来るまでに、学生は、全員が同じ英語教育を受けているわけではない。工業高校などでは、高校1年生まで英語の必修を置き、その後は必修として英語を置いていない場合が多いためである。

**5.4 metaphor（メタファー）分析によるピリーフ**

**（1）英語学習へのネガティブな考え（苦痛）**

105人中26人（25%）

学生の書いた英語学習を苦痛であるとするメタファーは、3つのサブ・カテゴリーに分類することができた。苦痛を表したものの、嫌悪感、絶望感である。

サブ・カテゴリー	メタファー
苦痛	有料で地獄を巡る事・地獄・病気・滝に打たれる苦行・登山 ・生きじごく・ゴウモン・精神的苦痛・辛いこと・頭痛
嫌悪感・恐怖	悪夢・拷問・こわい
絶望感	無人島に置き去りにされる・一番苦手

**（2）英語学習へのネガティブな考え（難解さ・理解不可能）**

105人中23人（22%）

サブ・カテゴリー	メタファー
理解不可能	未知の世界に行くこと・宇宙人との会話・ENIGMA（わからないから）砂漠・一面の青鷲・赤ちゃん時代にもどる
難解さ	パズル・水をつかむ・暗号解読・がけ登り・負け試合・さいの河原・負け試合・砂漠を彷徨する
退屈	子守歌・夢・さいほう（途中であきる）・夢（眠くなる）

学生の英語学習へのネガティブな考え方は、「暗記しないとできない」「できない」「英語を学習する意味を感じない」にまとめられる。英語学習に関してこうしたネガティブな考え方ができた背景には、これまでの学習経験、成績不振などが想定される。英語をなぜ学習するのかという問いに対する根本的な回答が自分の中で確立されていない。また、英語の学習は、滝に打たれる苦行などのメタファーに表れているように、訓練のようなものであると考えている。

こうした考えを持つ学生に対する対応策としては、自信を持たせるような機会を設定すること、暗記だけでなく、学習方略（strategy）を教えることで、自分自身の学習方法をつくりあげる機会をつくるこ

と、英語学習の楽しさを感じるような授業にすることであろう。

(3) 可能性・期待

105人中18人 (17%)

サブ・カテゴリー	メタファー
可能性	空・世界をつかんだ・グローバルな世界に近づく・文化を知ること・釣り（英語で新しい未来を釣る）
期待	広がる輪・新たな世界（自分の世界を広げる）・未知との出会い・楽しいこと
自身の変化・イメージ	天才でイケメン（英語をしゃべるとかっこいいから）・外国人・グレートだぜこいつは

英語学習へのポジティブな考えは、英語による外国人とのコミュニケーションの広がり、自己変革への期待、異文化を理解することへの期待、行動範囲の拡大への期待にまとめられる。これらは、学生が、imagined community（仮想コミュニティー）を作り上げていると言える。imagined community は、Norton(2001)<sup>15)</sup> が提唱したアイデンティティーを巡る sociocultural theory の概念であり、学習者が、現在はその一部ではないが、将来、その一員となるであろうコミュニティーを想像し、学習へのモチベーションが刺激される、とするものである。Murphey, Jin and Li-Chi(2004)<sup>16)</sup> は、この imagined communities を最大限に利用し、学習者のやる気を起こすことができる、としている(Teachers are in powerful positions to help create such imagined communities and to stimulate or stifle them (p.84))。学生の中には、こうした imagined communities を持ち、英語の役割を考え、英語学習がもたらす効果を意識しているものもいる。かれらが、このようなピリーフをどのように作り上げたかは、アンケートからだけではわからないが、自己の経験からというよりは、学校・家庭などを含む社会、マスコミなどの影響を受けたのではないかと考えられる。

(4) 必要性

105人中30人 (29%)

サブ・カテゴリー	メタファー
社会での必要性	食料（生きていくのに必要）・空気・重夢・海（広く使える、意味も深い）・社会への一歩
ソーシャル・ツール（コミュニケーションの手段)	遊び・人とのつながり・愛・インターネット・もてるための近道・外人とコミュニケーションをとる・言葉で会話できること・世界との共通点

英語学習を必要であると考えるカテゴリーでは、社会での必要性和、コミュニケーションの手段としての必要性が見られた。cultural capital は、Boudieu(1991)<sup>17)</sup> が命名した概念であり、言語学習に当てはめられて議論されてきた。言語を学習することが、文化的な資本となると考えることである。

(5) 学習方法

105人中7人 (7%)

サブ・カテゴリー	メタファー
継続の重要性	雨水をコップにためること・木登り・山登り・マラソン・階段を登る（少しずつやる勉強）・筋トレをすること
置き換え	日本語を組み替える教科

このカテゴリーに属するメタファーからは、学習者の言語学習への分析が含まれている。言語学習には、基礎が大切で、積み上げることで達成できると考えている。また、言語学習とは、日本語を組み替える教科、と書かれているように、訳読式(bottom-up式)学習方法をおこなってきたことが伺える。英語は、日本語に置き換えることだけが学習方法であると考えていると、翻訳機器に依存し、自ら言語を身につけることへの目的喪失にも繋がる危険性がある。ここでも、様々な学習方略、学習目標を紹介することが学生のもつ固定観念的なピリーフを変えさせるきっかけになると考えられる。

●全体の結果

ポジティブな回答 46%

ネガティブな回答 47%

回答の仕方がわからず、記入をしていない学生を除いた学生からの回答では、ネガティブな回答が、ややポジティブな回答を上回ってはいるが、ほぼ同数である。

5.5 英語学習の目標（ゴール） 119人回答

英語学習への目標	回答人数
コミュニケーション	66
英語力の向上	19
将来への投資	10
外部試験合格	7
単位取得	6
英語を楽しむ	4
自己向上	1
テストの点アップ	6

学習目標では、英語でもコミュニケーション力を伸ばすこと、が一番多かった。次に、英語力の向上（英語がわかるようになりたい）、そして英語を習得することで、将来への投資になるので勉強する、が次に多かった。

半数以上の学生が、英語を理解し、使えるようになりたいと考えていることはよい結果であった。学生のニーズに対応するためには、授業の中でコミュニケーション力を伸ばし、英語力をつける活動が必要であろう。そして、具体的な目標として、英検などを紹介することも効果的であると考えられる。また、授業の中での、outcomeを増やす（読んだ内容について質問をする、意見を書く、など）ことも効果があると思われる。

5.6 学生の英語力

学生の学力を知るために、2回目の授業で、英検3級の過去問を課した。リーディングセクション60分をおこなった。35点満点であるが、英検3級は60%で合格圏に入ることから、21点近く取れば、3級の実力はあると考えてよいだろう。試験の結果は、以下である。

受験学生 120人  
 平均 19.0点（35点満点）  
 合格圏 21点以下 71人

60%の学生が、英検3級合格圏内ではない（英検3級は、中学卒業相当である）。英語力向上のための対策としては、英検3級のCan-doリストの内容を授業に取り組みことも効果があると考えられる（Can-do リストは、英検合格の指標であり、項目をクリアしていれば合格する力があると想定できる）。14回の授業の中で、can-do リストの項目に関する

学習を入れ込み、15回目の授業で、再度、英検3級の試験をおこない、リストの項目の力がついたか確かめることにした。

6 授業案

6.1 モティベーション

以上の、学生へのアンケートの結果と文献から、アクション・リサーチとして、授業案を立てた。まず、学生の半数（47%）が、英語の学習に関してネガティブなビリーフを持っていることから、学生の学習へのモチベーションを上げることを考えた。

学生のモチベーションをあげる方略として、外国語を教える場において motivation を上げる授業への示唆として Dornyei(2001) が motivational teaching practice (p.29)で4つの柱を示しているが、その一部を参考として授業に取り込んだ。

- (1) Creating the basic motivational conditions
    - Appropriate teacher behaviors : 一方的に講義をするのではなく、interaction を心がける。
    - A pleasant and supportive atmosphere in the classroom : クラスの雰囲気をよくする。
  - (2) Generating initial motivation
    - Increasing the learners' goal-orientedness : 目標を設定する（英検3級 can-do list）。
    - Making the teaching materials relevant for the learners : 教材を学生の身近な話題に繋げる。
    - Creating realistic learner beliefs : learning strategy を教えることで、学習に関するビリーフが変化することを期待する。
  - (3) Maintaining and protecting motivation
    - Making learning stimulating and enjoyable : 学生が「発見」を感じられるように、語句の説明・文法の説明をおこなう。
    - Setting specific learner goals : 具体的なゴールを提示する。
    - Promoting cooperation among the learners (group work) : グループワークを入れる。
  - (4) Encouraging positive retrospective self-evaluation
    - Providing motivational feedback : 1行レスポンスに返事を書く。
    - Offering rewards and grades in a motivation manner : ポイントを与える機会を作る。
- また、モチベーションの低い学生への対応策として、Nunan (1999) は、次のように述べている。  
 "Make instrumental goals explicit to learners, break learning down into sequences of achievable steps, link

learning to the needs and interests of the learners, let learners bring their own knowledge and perspectives into the learning process, encourage creative learning use, help learners to identify the strategies underlying the learning tasks they are engaged in, develop ways in which learners can record their own progress (p.233)" この中から、学生が到達できる段階を示す、学生の手持っている知識を活かす、学習方略を示す、自己の学習記録をつける、を授業に取り入れることにした。

## 6.2 学習目標

学生の60%が、英検3級に達していないことを受け、英検3級のcan-do list にすべて○がつくことを目標とした。また、大学生であるので、高校までの暗記型学習法ではなく、「考える」こと、「判断すること」を入れ込む(例: 文法は、訓練ではなく aspect を知る、分析方法を知る、学習のストラテジーを知る、とし、それらを含む学習活動を入れ込む)ことにした。そして、outcome は、自分の身近な話題でおこない、英語を実際に使うという vision を学生が描けるように授業案を作成した。

## 6.3 アクション・リサーチ 実施段階

### 第1段階

第1回目の授業におけるアンケート調査の分析から、学生の英語学習への考え方、目標、学習へのニーズを知る。英検3級のテストを実施し、この段階での英語力を測り、学習、目標をたてる。授業環境を整える(名札作成・1行レスポンス・ポートフォリオ作成)

### 第2段階

調査の結果から、15回の授業の中に盛り込む内容を決定する。

<盛り込む内容>

異文化理解：ニュース(時事英語)・価値観や考え方を知る読み物・コミュニケーションについて(英語について)の概論

異文化理解のストラテジー：英語表現(コミュニケーションに使う表現)・Today's expression(自分の言葉で会話を作成する)

言語理解：テキストをベースとした task を作成 strategy を紹介する活動を入れる(slash reading・tips for listening)

### 第3段階

授業実践 授業内評価 毎回の授業の reflection (1行レスポンス)

## 第4段階

15回授業終了後に、アンケートを取り、英語学習への考え方に変化があったかを探る。また、英検3級テストをおこない、授業の中でおこなったストラテジーに効果があったか知る。考察および、今後の授業への示唆を引き出す。

### 6.4 リサーチ・クエスチョン

①学生の考え方は変化するか。(仮説：様々なストラテジーを教え、学生のニーズを考慮した授業案の実施により、学生の英語学習に関する考え方はポジティブな方へ変わるだろう)

②学生の英語力が伸びたか。(仮説：Can-do リストに基づいた目標設定をし、その目標設定のための授業を実施することで、学生の英語の力は伸びるだろう。)

英語リテラシーIの授業を組み立てるにあたり、学生の英語学習に対する考え方と、彼らの考えている学習目標を考慮した。学生のメタファーからわかったことは、多くの学生が、英語学習を苦しいものであると感じており(105人中47人)、英語学習に対しては、単語を暗記し、文法を学習するものであると考えている一方、英語を学ぶことに対して、英語学生の可能性への期待(105人中18人)を持っている学生がいること、であった。アンケートへの回答として、学習目標で多く挙げられていたのは、コミュニケーション(119人中66人)であった。学生は、コミュニケーション型な英語学習を期待しているとわかった。学生へのアンケート結果、TESOL 研究の文献(加賀屋、2010<sup>18)</sup>、都築・新垣、2010<sup>19)</sup>、横田、2010<sup>20)</sup>)を基に、英語リテラシーIの目標を次のように設定した。

- 1) コミュニケーションを軸とした授業展開をおこなう。
- 2) 学生の outcome を増やす。
- 3) 学生の英語学習への不安(anxiety)を取り除き、楽しいと感じ、自信を付けるような授業にする。
- 4) 外国の文化や価値観を知ることができるような内容を入れ込む。
- 5) 問題解決について考える機会を作る。
- 6) 発表ができる機会を作る。
- 7) 学生が、お互いに考えを出し合うことで新しい知識が生まれる機会を作る。

### 6.5 授業展開

- 1) 科目：英語リテラシー I
- 2) テキスト：Basic English for Scientists and Engineers  
金星堂
- 3) 授業の達成目標

英検 3 級の Can-do リストを参考に目標を定めた。

- ①簡単な物語や身近な題材に関する文章を理解することができる。
- ②簡単な文章を書くことができる。
- ③身近なことや簡単な内容について理解することができる。

#### 4) 評価方法

定期試験 60点 小テスト 10点  
レポート 10点 ポートフォリオ 20点

### 6.6 学生の reflection を知るため、学生を知るためのアイデア

1) ポートフォリオ：授業内容をまとめ、reflection ができるようにする。授業に積極的に参加するように、評価に入れ込む。

2) Today's expression (異文化学習として)：毎回覚えることで、積み重なり会話的な表現を学ぶ。文化の違い、言語の違いを知る。題材は、鈴木が、海外ドラマ・映画のDVDから学生が使う頻度の高い表現、外国の文化を知ることができる表現を抜き出し集めた。週1回の授業で1つの表現を、学生の日常生活と関連させたスキットで紹介した。英語の言語知識だけでなく、社会言語的な知識も必要であると考えからである。

例：TGIF It is not the end of the world Oops!  
No kidding It's a piece of cake No offense  
Cross my fingers for you

3) Reading on culture (異文化理解・言語理解) English Jokes など、文化・言語紹介・英語の勉強への tips を紹介した。

4) 授業評価(毎回自己評価・授業評価) (教師からのフィードバックを毎回書く)  
学生とのコミュニケーションを図る。学生の書いたコメントは、次の授業作りへのヒントとする。毎回授業の後に、学生の評価を読み、コメントを書くのは、クラスサイズの大きい場合では楽ではない。しかし、コメントを質問への回答に使うこともできると、私がきちんと読んで、ということを示すためにも、コメント書きは続ける意味がある。  
(写真 評価票)

### 自己評価 授業評価

Date	自己評価	自己評価(コメント)	授業評価	授業に対するコメント	質問など
11/1	ABCD	英語が、難し難しかった。『リテラシー』	ABCD	先生の授業は、面白くて面白かった。	
11/2	ABCD	英語	ABCD	英語	
11/3	ABCD	先生、ありがとうございます。『リテラシー』	ABCD	先生の授業は、面白くて面白かった。	
11/4	ABCD	英語が、面白くて面白かった。『リテラシー』	ABCD	先生の授業は、面白くて面白かった。	
11/5	ABCD	先生の授業は、面白くて面白かった。『リテラシー』	ABCD	先生の授業は、面白くて面白かった。	
11/6	ABCD	先生の授業は、面白くて面白かった。『リテラシー』	ABCD	先生の授業は、面白くて面白かった。	
11/7	ABCD	先生の授業は、面白くて面白かった。『リテラシー』	ABCD	先生の授業は、面白くて面白かった。	
11/8	ABCD	先生の授業は、面白くて面白かった。『リテラシー』	ABCD	先生の授業は、面白くて面白かった。	
11/9	ABCD	先生の授業は、面白くて面白かった。『リテラシー』	ABCD	先生の授業は、面白くて面白かった。	
11/10	ABCD	先生の授業は、面白くて面白かった。『リテラシー』	ABCD	先生の授業は、面白くて面白かった。	
11/11	ABCD	先生の授業は、面白くて面白かった。『リテラシー』	ABCD	先生の授業は、面白くて面白かった。	
11/12	ABCD	先生の授業は、面白くて面白かった。『リテラシー』	ABCD	先生の授業は、面白くて面白かった。	
11/13	ABCD	先生の授業は、面白くて面白かった。『リテラシー』	ABCD	先生の授業は、面白くて面白かった。	
11/14	ABCD	先生の授業は、面白くて面白かった。『リテラシー』	ABCD	先生の授業は、面白くて面白かった。	
11/15	ABCD	先生の授業は、面白くて面白かった。『リテラシー』	ABCD	先生の授業は、面白くて面白かった。	
11/16	ABCD	先生の授業は、面白くて面白かった。『リテラシー』	ABCD	先生の授業は、面白くて面白かった。	
11/17	ABCD	先生の授業は、面白くて面白かった。『リテラシー』	ABCD	先生の授業は、面白くて面白かった。	

## 7 結果検証

### 7.1 リサーチ・クエスチョン①

学生の英語学習への考え方は変化したか。

### 第 2 回目のアンケート結果 (105人)

1 英語を勉強することは ( ) のようである。

サブ・カテゴリー	メタファー
英語学習の性質 (継続・忍耐が必要) 30%	日課・スポーツ・楽器の基礎練習・ラジオ体操・ランニング・食事・筋トレ・山登り・散歩・トレーニング・息をする
苦痛 19%	太陽の下を走り続ける・持久走・地獄・修行・苦痛・フライパンの上にいる・催眠術・真夏に肉体労働・早起き
将来への希望・自己イメージ 21%	世界を見ること・外国人と話す・音楽(できるとかっこいい)・社会貢献・今後のため・未来への一歩・人とのつながり・世界との共通点・世の中に出ていくため・夢の拡大・選択肢が増える・海外旅行・世界を知る魔法・世界を手に入れる
よいイメージ 12%	貯金・ゲーム(やりなおせる)・イナゴの佃煮(食わず嫌いだ)・数学の公式(並びをきちんと理解すれば文ができる)・なっとうを混ぜる(味がでる)・雨上がり(すがすがしく終わる)・仕事(学ぶことが多い)・小さい頃嫌いだっただ食べ物(なんだかんだで好きになっていく)・暗号解読(初めは読めなくても、文を分けて考えることでわかる)・ダイエット(成果がでる)・冒険



英語学習に関する学生のビリーフ（鈴木）

英語の必要性 5%	働くこと・当たり前・息を吸うこと・人が寝る
英語の難解さ 9%	植物を育てる・暗号の解説・ウォータースライダー（わからなくても進み続ける）・イメージがない
英語の性質 2%	音楽（リスニングがある）・料理（うまく理解できること、理解できないことがある）
英語学習の性質（土台が必要） 2%	建築工事・からあげづくり（初めにもみほぐさないといけないから）

割合は、25%から19%と、わずかではあるが減少している。英語が難しいと捉える学生の割合は、22%から9%に減少し、英語学習に関するビリーフが増加している。これは、実際に授業の中で、学習ストラテジーを紹介したことで、英語学習への考えを深めたと考えられる。英語を勉強することで将来への希望や可能性を考えている学生の割合は、17%と21%で、あまり大きな変化はない。

全体としては、4月にはネガティブな考えを持っていた学生が約半数いたが、7月には、それが19%へと減少した。これは、4月に学生のビリーフを調査し、その結果とアンケート調査の結果、試験の結果を考慮し、授業を組み立てた効果が出たと考えてよいであろう。

考察：ビリーフの変化

4月の結果

ネガティブな考え（苦痛）	25%
ネガティブな考え（理解困難）	22%
可能性・期待	17%
必要性	29%
学習方法	7%

7月の結果

ネガティブな考え（苦痛）	19%
ネガティブな考え（理解困難）	9%
よいイメージ	12%
必要性	5%
将来への希望・自己イメージ	21%
英語学習の性質	34%

4月におこなったアンケート結果と7月の結果を比較すると、学生のビリーフの変化が見られる。英語を勉強することが苦痛であると考えている学生の

個々の変化(メタファーの変化)

7月の学生へのアンケート結果から、次のような変化が見られた。

メタファー：暗号解説 「初めは読めなくても文を分けて考えることで意味がわかる」

メタファー：イナゴの佃煮「食わず嫌いであったことを自覚させてくれました。もっと楽しみたいと思いました」

メタファー：日課「日々の積み重ねが大事。基礎を大事にしようと思いました」

授業でよかったこと・役に立ったこと

- ・英語の説明書の一部が読めた。
- ・楽しく受けられる。
- ・図形の単語がおもしろい。
- ・わかりやすいところ。
- ・単語を覚えた。
- ・スラッシュ・リーディング。
- ・English Jokes / Today's Expression
- ・授業の進め方が面白かった。
- ・英語で数字を一部書けるようになった。
- ・重要なところを繰り返してくれた。
- ・先生や学生がフレンドリーだったところ。
- ・数学のことを英語で覚えた。
- ・先生とのやりとり。
- ・実用的だった。
- ・英語の面白い言い回しなどを知ることができた。
- ・黒板に書いたこと。
- ・プリントでの学習。
- ・発音。
- ・答える機会が多くあったこと。
- ・単語テスト。

授業でストラテジーの1つであるスラッシュ・リーディングを取り入れたことで効果があったと考えられる。また、学生の興味を引く教材を使ったこと、基礎的なことを丁寧に指導した効果があったとも考えられる。

## 7.2 リサーチ・クエスチョン②

学生の英語力は伸びたか。

4月と7月に、英検3級の試験を授業中におこない、結果を比較する予定であったが、授業の進度を考慮し、7月の試験はおこなわなかった。そのため、実際の数字でのデータは得られなかったが、学生の自己評価では、次のような感想が書かれており、英語力が伸びたと感じた学生がいることがわかった。

- ・少しだけ英語力があがった。
- ・だんだんわかるようになった。
- ・文法に強くなった。
- ・英語の映画を見やすくなった。
- ・勉強しやすくなった。
- ・いろいろと知識がついた。
- ・自分の力で和訳・英訳ができたこと。
- ・新しい単語を覚えられるようになった。
- ・前より少し英語ができるようになった。

## 8. まとめ

今回のメタファーを使ったビリーフ研究の結果は、授業を組み立てる上でのナビゲーターの役割を果たした。ケース・スタディー(鈴木、2010)<sup>21)</sup>などで、学習者のビリーフの変化の過程を探ることができれば、ビリーフ研究に、さらに貢献できると考える。また、教師の持つビリーフと学生のビリーフを対話させながら学生の英語学習モデルを作ること、これまでのビリーフ研究の幅が広がると考えられる。

授業とは、学生と出会う場である。そして、learningとは、与えるだけではなく、お互いのことを知り、学ぶことである。そういう意味では、学生とのinteraction、学生の発表を取り入れたことで、学生の相互理解が深まり、モチベーションが多少上がったように感じた。

また、今回の研究、実践を通して、「英語ができない」との自己評価をしている学生が多いことが彼(女)等の英語学習へのモチベーションに影響を与えていることがわかった。テストの結果や、資格を取ることに端を発したモチベーションは、継続性が無いという研究結果もある。英語の力をテスト

のみで測るのではなく、コミュニケーション能力、発想力、理解能力など、多角的な評価方法を取り入れていくことが望まれる。英語の力は、ペーパーテストだけではなく、総合的な活動で測るものであるとわかれば、学生のモチベーション向上にも寄与するであろう。英語が面白い、もっと知りたい、と感じることで、自主的に英語を勉強するようになる。結局、学生に必要なことは、英語を通して世界を知り、海外に出ても、いろいろな人とコミュニケーションが取れる人間力なのである。

## 参考文献

- 1) Horwitz, E. K. (1987). The beliefs about language learning of beginning university foreign language students, *The Modern Language Journal*, Vol.72, 283-294.
- 2) Trang, Tran Thi Thu, Baldauf, R.B. & Moni. K.. (2013). Foreign Language Anxiety: Understanding Its Status and Insiders' Awareness and Attitudes, *TESOL Quarterly*, 47, No. 2. 216-243.
- 3) Sakui, K. and Gaies, S. J. (1999). Investigating Japanese learners' beliefs about language learning. *System*, .27, 473-492..
- 4) Nishioka, H. (2002). Student beliefs about language learning. Unpublished M.A. project. Columbia University Teachers College.
- 5) Suzuki, S. & Kumazawa, T. (2008). Constructing a Japanese secondary students' beliefs model. *STEP BULLETIN*, .18, .215-223.
- 6) Kramersch, C. K. (2006). Metaphor and the subjective construction of beliefs, *Beliefs about SLA: New research approaches*, 109-128.
- 7) Tanaka, K., & Ellis, R. (2003). Study abroad, language proficiency, and learner beliefs about language learning, *JALT Journal*, 25 (1), 63-85.
- 8) Wenden, A. (1987). How to be a successful language learner, *Learner strategies in language learning*, 103-117.
- 9) 佐野正之(2007). アクション・リサーチのすすめ, 大修館.
- 10) Nunan, D. (1999). *Second language teaching and learning*. Boston: Heinle & Heinle.
- 11) 佐藤郁哉 (2008). 質的データ分析法, 新曜社.
- 12) 小林ひろみ(2012). *JACET-Kanto Journal*, 9, 91-94.
- 13) Dornyei, Z. (200). *The psychology of second language acquisition*. Oxford: Oxford University Press.

- 14) Yashima, T. (2009). International posture and the ideal L2 self in the Japanese EFL context. In Z. Dornyei & E. Ushioda (Eds.), *Motivation, language identity and the L2 self*, 144-163. Bristol, UK: Multilingual Matters.
- 15) Norton, B. (2001). Changing perspectives on good language learners, *TESOL Quarterly*, 35, 307- 322.
- 16) Murphey, T. J. C. and C.Li-Chi (2004). *Learners' construction of identities and imagined communities*, 83-100.
- 17) Bourdieu, P. (1991).:Language and symbolic power, *Social Science Information*, 1.6, 645-668.
- 18) 加賀谷哲也 (2010).「英語嫌いの大学生をどう英語好きにするか」 *The English Teachers' Magazine*,28-30.
- 19) 都築幸恵・新垣紀子(2010).「心理学から見る、学習嫌いの生徒の心理とその対処」 *The English Teachers' Magazine*, .35-37.
- 20) 横田禎明 (2010).「英語嫌いに英語を楽しませようとする試みが成功しないメカニズム」 *The English Teachers' Magazine*, 38-39.
- 21) 鈴木 栄 (2010). Learners' beliefs and change.英語教育研究,第 5 号, 9-26.

参考資料 (アンケート)

鈴木 栄

このアンケートは、皆さんの英語学習の経験などについて知るためのものです。授業の評価とは一切関係ありません。英語の授業を組み立てる際に参考にさせていただきます。

クラス ( ) 学籍番号 ( )

氏名 ( )

難しい漢字はふりがなもつけてください

1 学校での授業以外で英語の学習をしていますか。

① ( ) はい ② ( ) いいえ

①「はい」と答えた人は、どのような学習をしているのか書いてください。

②「いいえ」と答えた人は、なぜしていないのか書いてください。

2 海外経験 (短期・長期) について書いてください。無い場合は、「無し」と書いてください。また、行ってみたい国を書いてください。

海外経験:

行ってみたい国と理由:

3 英語の資格 (検定) 試験や TOEIC を受けたことがあれば、その年と結果を書いてください。

例: 2009年10月 英検準2級合格

4 ( ) に言葉 (文) を入れてください。そして、その言葉 (文) を書いた理由も書いてください。

英語を勉強することは、( ) のようである。

5 あなたにとって、英語学習の目標 (ゴール) は何ですか。

6 あなたのこれまでの英語学習歴 (塾なども含む) を書いてください。

<小学校以前から小学校時代>

<中学校時代>

<高校時代>

7 これまでの英語の授業で面白かったこと、役にたったことを書いてください。

①面白かったこと:

②役にたったこと:

8 この授業で期待することを書いてください。

9 自己紹介を英語で書いてください。

ありがとうございました。